

ステレオタイプ化する宗教的リアリティ

いしいけんじ

石井研士

ステレオタイプ化する宗教

思うに、テレビが日本人の宗教性に与える影響については、もっと早くから研究が始められていてしかるべきだった。今でこそテレビへの依存は減少しつつあるものの、戦後テレビが日本人に与えた影響の大きさはいうまでもないだろう。そのテレビの中で一九七〇年代に、現在まで続くある種の番組が生まれ維持されてきている。それは超能力や心霊を扱った番組である。

こうした超能力や心霊現象を扱った番組を含めて、テレビで放送される宗教はステレオタイプ化されている。個々の宗教系統に関して、決まったイメージが割り振ら

れ固定化されているのである。日常生活の中で具体的な宗教に触れる機会が大きく減退する中で、宗教のステレオタイプはより大きな現実的問題として存在するようになっていく。

テレビと宗教

戦後の世相の移り変わりを扱った書籍や雑誌をめくると、必ず目にする写真がある。街頭テレビにむらがる黒山の人だかりを写した写真である。日本でのテレビ放送の開始は昭和二八年二月一日で、NHK東京放送局が西新橋にあった放送会館第一スタジオから菊五郎劇団「道行初音旅・吉野山」を放送した。民放は同年八月二八日

の日本テレビが最初で、社長の正力松太郎は街頭に受像機を設置して大衆への普及を図ることを宣言している。⁽¹⁾

新橋駅広場、渋谷ハチ公前広場など五三箇所⁽²⁾に設置された街頭テレビには大勢の人々が群がった。一〇月二八日に放送された白井義男とテリ・アレンのボクシング世界フライ級タイトルマッチには「受像機のあるところ群衆があふれ、交通は渋滞し、商売にも支障をきたした」という。⁽³⁾

高価だったテレビが普及するのは昭和三〇年代になってからである。早くも昭和三年に評論家の大宅壮一が「一億総白痴化」を指摘している。大宅は「テレビに至っては、紙芝居同様、否、紙芝居以下の白痴番組が毎日ずらりと列んでいる。ラジオ、テレビという最も進歩したマスコミ機関によって、『一億総白痴化』運動が展開されていると言って好い。」と述べた。⁽³⁾

開局当時、NHKが放送していた宗教と係わる番組は、映画と年中行事であった。映画は記録映画で「お伊勢参り」「大仏様と子供達」「お遍路さん」「法隆寺復元」「尼僧さん」などであった。他にも「社会探訪」として、

「お札の誕生」「角切り祭」「中山の大荒行」などが放送されている。こうした状況は日本テレビでも同じである。「良寛さん」「山祭り」「奈良の大仏」など放送内容は変わらない。

年中行事に関する放送は雛まつり、七夕、クリスマスなどで、とくにクリスマスに関する番組が驚くほど多い。昭和三〇年代に入って行事の実況中継が行われるようになる。総持寺や浅草寺の節分会、神田明神の夏祭り、青山学院教会のクリスマスの礼拝風景、浅草寺の盂蘭盆会の法要、天神祭などが、ラジオの時と同じように実況放送されている。当時の生活の中にあつた行事がそのまま放送されていたということであつて、特別な意図は感じられない。

宗教放送ブームの到来

昭和三五年当時「宗教放送ブーム」といわれたことがある。昭和二六年に民間ラジオ放送局が開局したのに伴い、多くの教団が次々に番組を放送するようになった。相次ぐ民放の開局は、信教の自由によって活動の制度的

基盤を獲得した宗教団体に大きな活動の場を与えることになった。早くも昭和二十六年には金光教、天理教、キリスト教系の宗教団体、二八年には孝道教団、二九年には東本願寺、西本願寺、曹洞宗が放送を開始している。そして昭和三五年頃には「宗教放送ブーム」と言われるまでになるのである。そして、ちょうどテレビが一般に普及しつつあった当時、テレビでも「宗教ブーム」到来か、といわれるまでになった。

昭和三五年四月三日、日本テレビは日曜日朝七時二〇分から二五分間にわたって「宗教の時間」を開始した。「宗教の時間」は日本テレビの自主制作番組で、以後平成一三年三月まで放送された。「禅と実生活」「臨済宗妙心寺派」「伝教大師と御受戒」が当初の放送内容である。「宗教の時間」は、日本テレビの社長であった正力松太郎が、戦後の価値観の混乱のなかで宗教情操の必要性を感じ、スポンサーなしの自主制作番組として始めた番組だった。正力は肉親の命日には肉を絶って袈裟姿で読経する熱心な浄土宗の信者であった。また正力は、昭和三七年に仏教諸教と協力して財団法人全国青少年教化協

議会を設立した。同じ年の七月一〇日には、NHKが教育テレビで「宗教アワー」を開始した。ラジオでの「宗教放送ブーム」は、教団提供番組の隆盛であった。しかしこのブームはテレビに受け継がれることなく、宗教番組はバラエティ番組化していくのである。

マスメディアが宗教に与える影響、教団の新たな布教手段としてのテレビ

ラジオからテレビへのメディア状況の変化に機敏に対応した研究者は井門富二夫一人だったのではない。当時文化庁の宗教担当部署に在籍していた井門は積極的に調査研究を行い、「視聴覚布教の実態調査」(『宗教便覧』文部省、昭和二十九年)、「宗教放送の実情」(『宗教年鑑』昭和三五年度版) 文部省、昭和三十六年、「大衆社会における間接布教——宗教放送の利用について——」(『宗教公論』三〇巻六号、昭和三十六年)を次々に発表していった。しかしながら、その後この領域に関心を持つ研究者は、しばらく現れなかった。

ここで詳細に研究史を述べるつもりはないが、井門と

その後の研究には大きな相違がある。井門が主に念頭に置いていたのは宗教団体のメディア利用の実態と問題点であった。一九八〇年代に始まる研究は、日本社会の情報化、とくに八〇年代がニューメディア元年といわれたように、日本社会が高度情報化していく中で、宗教団体を含んだ宗教がどのように変容していくかに関心が存在した。阿部美哉や筆者の関心は、まずアメリカで大きな話題になっていたテレヴァンジェリスにあったのであり、その後は同様に高度情報化を体験するであろう日本社会における宗教のあり方だった。その後インターネットの普及にともなってメディアと宗教に関心を抱く研究者が現れたが、彼らの関心はあくまでインターネットを中心とした宗教現象もしくは社会との関わりであって、ラジオはもちろんテレビの及ぼした影響に関する関心と研究はすっかり抜け落ちたままだった。

今ひとつ指摘しておきたいのは、マスコミュニケーションを専門とする研究者の無関心だった。一九七〇年代になって、バラエティ番組としての超能力番組や心霊番組がテレビ番組の一ジャンルとして確立したにもかかわらず

らず、彼らがこうした番組に目を向けることはなかった。都市化を扱った社会学者が宗教に言及したのに対して、マスメディアやマスコミュニケーションを対象とした研究者は関心を抱かなかつたのである。

テレビの宗教番組はより重要性を持つようになった

最近、テレビで視聴率がとれなくなったといわれる。紅白歌合戦、巨人戦の視聴率低下はいうまでもなく、視聴率のとれるドラマやバラエティ番組が少なくなったといわれる。そうしたなかで、一九七〇年代以降安定的にある時は高視聴率を獲得しながら放送されてきたのが超能力や心霊、占いを売り物にしてきたバラエティ番組であった。現在も、テレビではごく日常的に、占い師が芸能人の将来を預言したり、目には見えないオーラ、守護霊、前世が当たり前のように語られ、除霊することで不幸の原因がなくなる、という放送が流されている。

また、宗教団体の起こした事件に関して、集中的に報道されることは珍しいことではない。国会で軍事三法案